

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 8 月 7 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25463360

研究課題名(和文) 家族支援を考える院内教育担当看護職のための現任教育プログラム開発

研究課題名(英文) Program development for the "case study in-house group training program for family nursing" at medical facilities

研究代表者

山崎 あけみ (Yamazaki, Akemi)

大阪大学・医学系研究科・教授

研究者番号：90273507

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：看護職が自信を持って、家族をアセスメントし、家族看護を実践できるよう、OJTとOff-JT 融合型で、研修の企画運営者・受講者が協働する「家族看護のケーススタディ研修」を開発した。介入群には、半年間に90分研修を4回、対照群には、同じ学習内容を講義形式で実施した。FINC-NA日本語版により、研修前・直後・1ヵ月後の変化を測定し、効果の相違には、繰り返しによる分散分析にて交互作用により検討した。実施可能性と短期的効果を検証した結果、看護職のための家族看護態度尺度の下位概念のうち、家族のことを負担に思う、というB scoreのみ、ケーススタディ研修の短期的効果が見出された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to evaluate the feasibility and short-term impact of case-study training in family nursing care targeting mid-level nursing professionals. The intervention group participated in four 90-minute case-study training sessions over 6 months, while the control group participated in two 90-minute lectures. Using primary outcome variables as evaluation indexes, we measured the participants' total scores on the Family Importance in Nursing Care scale and four sub-items three times (before, immediately after and 1 month after training) and then conducted two-way repeated-measure analysis of variance. Although the primary impact due to the different measurement times was significant, no significant difference was observed in the interaction between measurement time and training differences. Of the four sub-items, significant interactions as a result of measurement time and training differences were observed only in Fam-B.

研究分野：医歯薬

キーワード：家族看護学 現任教育

1. 研究開始当初の背景

国外では、家族看護に関する現任教育の重要性は、80年代から論じられている。単施設からの報告では、高齢者の長期療養施設におけるロールプレイ研修・精神科病棟・1年間小児リハビリテーション病院で8週間の家族システム看護研修、いずれも家族看護実践に一定の効果を示している。多施設共同研究では、米国と欧州の6大学で共同開発されたウェブでの家族看護認定プログラムの導入、スコットランド・フィンランドの大学では、2年の継続教育を提供している。これら多施設共同研究は、WHOによるFamily Health Nurse(FHN)教育プログラムを基盤とし、数か月から2年、実践演習も備えNPの育成を視野にいれたものである。それでも、学術的な家族看護学研究成果をどのように実践に活用するのには議論が重ねられており、必ずしも容易ではない。

国内では、近年、厚生省から新人看護師研修ガイドラインの提示、また多忙な業務を考慮し、様々な教育内容の遠隔システム・eラーニングの検証など、現任教育の創意工夫がされている。各施設の看護部には、教育委員会があり、年間の研修プログラムを企画・運営している。在宅重視の趨勢から、脆弱化・多様化した家族に看護職が関わる場面は増えている一方、家族看護に関する現任教育は、例えば技術教育研修と比較すると、不可視的、多様性に富み、研修の企画運営実施後の評価も困難と捉えられがちである。

2. 研究の目的

看護職が自信を持って、家族をアセスメントし、家族看護を実践できるよう、On-the-Job-Training(実務を通じて職場内で行われる教育 以下 OJT) Off-the-Job-Training(職場を離れて行われる教育 以下 Off-JT) 両側面から、現任教育プログラムを開発することである。

3. 研究の方法

(1)概要

2013年は、研究分担者2名の医療施設において、家族看護に関する院内研修プログラム(案)を検討し、試行した。この案を基盤として、2014年には、研修プログラムの教育目標・シラバスを確定した。プログラムの詳細は、主な発表論文・雑誌論文で公開した。

院内のリソースナースにより家族看護研修を企画・運営することを希望する研究協力施設を募り、2014年-2015年に、「家族看護のケーススタディ研修」の実施可能性と短期的効果の評価テストを行なった。

(2)対象

本研究は、OJTとOff-JTを効果的に融合させた家族看護研修プログラムとするために、研修の企画・運営者は、その院内のリソースナース(CNS/CN/教育委員等)可能な限り複

数名とした。また、研修の受講者は、各病棟で業務の中核となっている中堅層とした。

研修の企画・運営者と受講者は、プログラムの実行可能性および、短期効果の評価を行なった。

(3)プログラム内容

研修の目標

家族看護の基本的な知識・技法の獲得、および考え抜く能力と態度の獲得とした。前者については、家族看護の技法であるジェノグラム・エコマップを活用できる、とし、後者は、日々の業務の家族看護に関する事案について、患者・家族・医療者が納得できる看護実践ができるとした。

GIO(一般教育目標):受講者が、業務上の各チームで、家族対応・看護計画立案・カンファレンスにおいてリソースとなり、チームを牽引する。

SBO(行動目標):研修受講後、受講者は、ジェノグラム・エコマップ・家族に関する理論を必要時には活用し、家族像を縦(家族内部・外部の相互ネットワーク)横(家族のこれまでの歴史・10年後次のライフサイクル)広がりをもって理解し、家族への対応にすいてチームが納得できる方向性を見出せる。

研修プログラム内容

学習項目は、家族とは、家族看護過程
基礎機能 家族発達段階 システム
としての家族の全体性 ジェノグラム
エコマップ 円環的質問法 家族コ
ミュニケーション 価値観(ピリーフ)
家族内勢力 役割 家族資源 凝集
性・適応力 境界 恒常性 移行の17
項目と決定した。

学習方法は、企画運営者と受講者が協働し、かつ相互に学びの主体となり、企画運営者の講義にもまた受講者が演習を行なう際にも、自ら現場で経験したケースを教材として扱うことを重視した。

具体的には、90分の研修を約半年間で4回程度実施する。第1回は、企画運営者が、自らの家族看護実践事例を30分程度展開しながら、家族看護過程の解説を行なう。また、受講者は、ジェノグラム・エコマップ演習において、自らがケースとして分析しようとしている家族について振り返る。第2回は、家族看護の目標設定・家族に関する理論を、企画運営者が講義する。その後、受講者は、講義内容を参考にしながら、今回自分が分析しようとしている家族について演習にて討議する。第3回は、講義はせず、受講者のケースについて、グループ内で話し合う。第4回は、事例紹介 ジェノグラム・エコマップによる家族像理解 基礎機能・発達段階目標とする家族像(ジェノグラム・エコマップ) 実践内容 考察という流れでケーススタディ発表会を開催する。

(4) プログラム評価の方法

実行可能性

受講者と企画・運営者に研修の学習項目から 5 件法で理解度・難易度と、自由記載により回答を依頼した。

短期的効果

FINC/NA (看護職のための家族看護態度尺度)日本語版 26 項目(Cronbach's alpha0.88)と、家族への直接的ケア・間接的ケア頻度 10 項目 7 件法を用いた。FINC/NA は、4 つの下位尺度からなり、病院や地域で働く看護職に対して領域横断的に測定可能である。得点が高いほど、看護ケアにおいて家族を重要だととらえていることを示す。研修の受講前・受講直後・受講してから 1 カ月後の 3 回測定を行った。

介入群には、院内のリソースナースによる「家族看護のケーススタディ研修」を実施し、対照群には、外部講師が学習項目からに関する内容を 1 日研修の講義形式で提供した。

統計処理は、SPSSver22 を用いて、基本等軽量を求め、2 群比較には、適宜 Chi-square test, t test, Mann-Whitney U test を用いた。介入群により効果の相違には、繰り返しによる分散分析 Repeated-measure ANOVA にて交互作用により検討した。有意水準は、5%とした。

(5) 倫理的配慮

A 大学「人を対象とする研究」に関する倫理委員会で承認を得て行った。また、適宜、医療施設における倫理委員会の承認も受けた。特に留意した点は、以下の点である。

第一に、研究への協力は自由意志であることを伝え、研修に参加したいものの、研究協力を拒否したい場合には、他の参加者・研修企画運営者のいずれにもわからないように白紙で用紙を提出するなど促した。第二に、調査の回答内容は、受講者の能力を評定するものではなく、研修内容の評価であることを伝え、また結果は、個人が特定する形で公表されることはないことも説明した。

4. 研究成果

表 1 介入群・対照群のベースライン

	介入群 n=21	対照群 n=20	p 値
性別 (女/全体)	19/21	20/20	0.49
年齢	30.9±6.5	35.1±7.4	0.06
臨床経験	9.2±6.4	12.05±6.3	0.16
受講歴	2.1±1.01	2.7±1.25	0.09
管理職経験	0/21	3/17	0.10
FINC/NA	88.86±9.6	94.75±10.0	0.06
RNC	39.29±4.4	39.85±4.2	0.68
CP	28.71±3.7	30.85±3.3	0.60
B	10.05±2.0	9.5±3.4	0.53
OR	12.14±3.1	13.85±2.5	0.06

(1) 対象の概要

表 1 に介入群と対照群の概要を示した。属性も、また研修受講前の FINC/NA 得点も 2 群に統計的有意差はみられなかった。脱落は、介入群では 2 名、対照群では 7 名であった。

(2) プログラムの実行可能性・短期的効果

プログラムの実行可能性として、受講者と企画・運営者に研修の学習項目 17 項目について 5 件法で理解度・難易度の回答を依頼した結果、ジェノグラム・エコマップは、双方から理解しやすいと評価を得た一方、家族看護過程は、受講者だけでなく、企画・運営者からも最も難しいと回答があった。そして、企画・運営者からは研修時間外に受講者の支援が必要であったとも回答された。

短期的効果として、FINC-NA 総得点 RNC (家族ケアの資源としての家族) CP (対話すべき相手としての家族) OR (家族の資源としての家族) いずれも、2 群に統計的な有意差はみられず、B (負担としての家族) のみが、研修の違いと測定時期に有意な交互作用がみられた。(F=3.964, p<0.05)

自由記載の分析結果からは、“家族看護の重要性が理解できた”“家族への理解の方法が深まった”といったカテゴリーは、2 群とも抽出されたが、“受講後、自分と患者家族とのかわりかかわりが変化した”といった実践に根付いたカテゴリーは、対照群からは抽出されず、介入群からのみであった。

(3) まとめ

本研究は、看護職が自信を持って、家族をアセスメントし、家族看護を実践できるよう、OJT と Off-JT 融合型で、研修の企画運営者・受講者が協働する家族看護のケーススタディ研修を開発した。さらに、実施可能性と短期的効果を検証した結果、実施することは可能であるが、「家族看護過程」など一部の学習項目は、集合研修の時間外の学習支援が必要であったことが示唆された。また、看護職のための家族看護態度尺度の下位概念のうち、家族のことを負担に思う、という B score のみ、ケーススタディ研修の短期的効果が見出された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

Feasibility and short-term impact of the “case study in-house group training program for family nursing” at medical facilities, Yamazaki A, Tsumura A, Mine H, Kimura C, Soeda A, Odatsu, K & Kiwado W. International Journal of Nursing Practice, 査読有 2017 電子版
DOI: 10.1111/ijn.12503

山崎あけみ・峰博子・亀山花子(2014)
現任教育で家族看護をどう教えるか - 家族
看護のケーススタディ研修という方法論・家
族看護・査読無 12(2), 138-147.

〔学会発表〕(計6件)

Tsumura A, Kimura C, Mine H, Soeda A, Odatsu K, Makita S, Hori M, Yamazaki A.
Case-study results of the training of hospital
nurses involved in family nursing- Changes in
the frequency of direct and indirect nursing care
for the family, 13th International Family Nursing
Conference 2017 June 14, Pamplona.

徳谷理恵 奥村三津子 山本茂子 堀
江友紀 前田由紀 津村明美 峰博子 木
村千里 山崎あけみ 家族看護ケーススタ
ディ研修受講後の中堅看護師の看護実践に
おける変化 第31回日本がん看護学会学術
集会 2017年2月4日 高知市県民文化ホ
ール(高知県)

Yamazaki A, Tsumura A, Mine H, Soeda A, Odatsu K, Kimura C, Tokutani R, Okumura M, Yamamoto S, Horie Y, Waguri H Case Study for
Japanese Family Nursing Care: Preparing a
Course Syllabus 11th Mixed Method International
Research Association Asia Regional Conference
2015 Sept, 19th Osaka

Tsumura A, Yamazaki A, Mine H, Soeda A, Odatsu K, Kimura C, Tokutani R, Okumura M, Yamamoto S, Horie Y, Waguri H Case Study for
Japanese Family Nursing Care: Preparing a
Course Syllabus 12th International Family
Nursing Conference 2015 Aug, 15 Odense

山崎あけみ 津村明美 木村千里 峰
博子 尾立和美 和栗裕子 副田明美 家
族看護のケーススタディ研修 第34回日本
看護科学学会 交流セッション 2014年11
月29日 名古屋国際会議場(愛知県)

山崎あけみ 峰博子 津村明美 尾立
和美 副田明美 木村千里 家族看護のケ
ーススタディ研修 第33回日本看護科学学
会 交流セッション 2013年12月6日 大
阪国際会議場(大阪府)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山崎 あけみ (YAMAZAKI AKEMI)
大阪大学大学院 医学系研究科 教授
研究者番号: 90273507
(平成26年まで 上智大学 総合人間科学
部 准教授)

(2) 研究分担者

峰 博子 (MINE HIROKO)
大阪市総合医療センター 看護部 研究員

研究者番号: 60450235
(平成26年まで公益財団法人田附興風会
研究員)

津村 明美 (TSUMURA AKEMI)
静岡がんセンター 看護部 研究員
研究者番号: 90595969

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

副田明美 (SOEDA AKEMI)
豊後大野市民病院 看護部長
(平成26年まで大分赤十字病院 看護師長)

尾立和美 (ODATSU KAZUMI)
大分赤十字病院 緩和ケア認定看護師

徳谷理恵 (TOKUTANI RIE)
大津赤十字病院 がん看護専門看護師

奥村三津子 (OKUMURA MITSUKO)
大津赤十字病院 看護師長

山本茂子 (YAMAMOTO SHIGEKO)
大津赤十字病院 緩和ケア認定看護師

堀江友紀 (HORIE YUKI)
大津赤十字病院 がん化学療法看護認定看
護師